

2021年4月11日～4月17日 各家庭でのディポーション用テキスト

■軽蔑に耐える訓練（2/3）

軽蔑を無視し、自己弁護を避け、神の助けにより頼むようになること、これが軽蔑に耐える訓練である。この訓練を受けることのできる者は巨人の首を持って歩み去り、心の美しい者はおごり高ぶる者の剣を奪い取り、神に信頼する者は多くの人に勝利をもたらすことができる。この訓練に耐える者には、侮辱の中から榮譽がもたらされる。

ダビデは、ナバルの冷笑的な侮辱のことばに、もう少しで負けるところであった（1サムエル 25:2-13）。この富豪は横柄にも、「ダビデとは、いったい何者だ。エッサイの子とは、いったい何者だ。このごろは、主人のところを脱走する奴隷が多くなっている」と言った（10節）。ダビデとはだれか。恩人、保護者、主に油注がれた者である。しかしナバルに言わせれば、主人を捨てて逃げた奴隷、裏切り者、法のさばきから逃げている者であるというのだ。何という不正、ダビデの思慮深さに対する何という忘恩、ダビデの心づかいに対する何という感謝のなさであろう。ナバルはダビデを、どこから来たのかもわからない一介の逃亡者のように扱ったのである。

ダビデもこのときばかりは怒りをとどめることができなかった。ナバルはダビデの従者に守られたのであった。そしていよいよ羊の毛を切る季節になった。ナバルは当然その恩人に対して礼を尽くすべきであるのに、かえって無礼窮まることばを吐いた。このような、恩をあだで返すような態度に対して、ダビデのとるべき手段は一つしかなかった。「めいめい自分の剣を身につけよ」（13節）。サウルの理由のないねたみにも、ゴリヤテの侮辱に満ちたのろいのことばにも動じなかったダビデが、この年老いた意地の悪い牧羊者の嘲笑にがまんすることができなかったのである。「ダビデとは、いったい何者だ」と言うのか。彼の心は怒りに燃え、その剣は鋭く光った。

しかし、あわれみに富む神は、怒りに燃えるダビデに、アビガイルを通して接してくださった（23-31節）。アビガイルは、ダビデの早まった復讐を止めようとして道を急いだ。彼女は、嘲笑のことばのゆえに陰気に不機嫌になっていたダビデの心

を力づけた。彼女のことばは、軽蔑に耐える訓練の道を描き出している。この人のことを気にかけないでください（25 節）、背きの罪をゆるしてください（28 節）、あなたは主のものであり、主の奉仕をしておられます（28 節）、他の腹だたしい事件のときにも、あなたはりっぱに耐えてこられました（28、29 節）、あなたに対する神のご計画がすべて成就する時がまいります、その日に「むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように」（31 節）。

私たちが他人から侮辱されたり、体面を傷つけられたりする試練の中にあるとき、愚かな者にその愚かさにしたがって答えをすることは愚かしいことであるということを、思い起こすことができますように。そうすることによって、私たちは「彼と同じように」なってしまう（箴言 26:4）。愚かな者は去り、その愚かさも消え失せ、その嘲笑もやむ。私たちは愚かな者の軽蔑を無視し、ひたすら自分の義務を尽くすことによって、自分自身を御することができ、あすのために心を用いることができるようになる。ダビデの息子はこう言うことができた。「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる」（箴言 16:32）。軽蔑に負けるなら、それによって破滅に至る。しかし、軽蔑に負けること自体を軽蔑するなら、喜びを得るに至る。

ダビデはまた、ミカルの軽蔑にあった（Ⅱサムエル 6:20-23）。その日はダビデにとって喜びの日であった。歌をうたい、犠牲をささげ、大声で叫び、角笛を吹き鳴らし、すべての民が分け前にあずかった。そして、何にもましてうれしいことに、神の箱が彼らのうちにあった。ダビデは「家族を祝福するために戻る」（20 節）。彼は何と顔を輝かし、喜びに満たされて帰って来たことであろう。彼はその日の祝福を、家の者と分かちたいと思っていた。あるいは彼はひどく元気を出しすぎ、はめをはずして興奮していたのであろう。あるいはその喜び方に、もう少し自制心があってもよかったのかもしれない。家族の者が彼のしていることをにこにこして見ていれば、ダビデは満足したであろうし、またやさしいひとことが彼に注意を促したことであろう。神に対する感謝のひとことが、彼の心を喜ばせたことであろう。ところが、そうしたものは反対に、彼を迎えたのは、ミカルの慎重なみじめな卑しいことばであった。「イスラエルの王は、きょう、ほんとうに威厳がございましたね」（20 節）。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十三章「軽蔑に耐える訓練」より】
※この本は図書に置かれています。さらに読まれたい方はどうぞご利用下さい